

49 主語の移動を駆動する要因

生成文法理論において「主語の移動を駆動する要因」の解明は過去から現在に至るまで重要なトピックであった。本稿ではこの問題を概観するが、初期の理論においては(1)のような単純な英文の主語が移動するとは考えられていなかった。なぜなら、(1)の英文は(2a, b)のような句構造規則で直接、生成可能だったからである。標準理論と呼ばれたChomsky(1965: 71)では要約して言うと、主語の文法関係は「Sに直接支配されるNP」だと考えられていた。

- (1) He hit her.
- (2) a. $S \rightarrow NP\ VP$ b. $VP \rightarrow V\ NP$

それでは、1970年代以前の理論で主語が移動する構文は全くなかったのかと言うとそうではなく、いわゆる**NP移動 (NP movement)**と呼ばれる現象がそれに該当していた。NP移動は大きく2つに下位区分される。すなわち、(3)の**受動変形 (passivization)**と(4)の**繰り上げ (raising)**である。(△はその位置が空であることを、-enは過去分詞の接辞であることを、tは痕跡を表す。)

- (3) a. $\triangle\ Past\ be\text{-}en\ hit\ her\ by\ him.$ → b. $She_i\ was\ hit\ t_i\ by\ him.$
- (4) a. $\triangle\ Pres\ seem\ [he\ to\ be\ rich].$ → b. $He_i\ seems\ [t_i\ to\ be\ rich].$

(3b)の意味上の能動文は(1)であるから(但し、統語上の能動文は正確には(3a))、she (her)は(3a)のhitの後ろの目的語位置にあったと考えざるを得ない。また、(4b)のseem(思われる)の意味上の主語はheではなく[he to be rich](彼が金持ちであること)だと考えられるので、(4a)の基底構造ではheはto be richの前に存在していたと考えざるを得ない。そして、herやheはそれぞれ文頭に移動し、派生構造の(3b)、(4b)が生成されるということである。

ここで、主語の移動は関与しないと考えられていた(1)のような文も、1980年代に入り、遊離数量詞などの様々な根拠から、主語は基底構造では文頭の位置ではなく、VP(動詞句)内の指定部(=動詞や目的語より前の位置)に基底生成されると考えられるようになった((5)参照)。これを**動詞句内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis; VISH)**と呼ぶが、この考えに従えば、S, V, Oなどの全ての要素が基底では一貫して動詞句内に存在することになる。

- (5) $[IP\ \triangle\ Past\ [VP\ he\ hit\ her]].$ (IP(屈折要素句)は従来のS(文)のこと)

そうすると、本稿の主題である(3a)、(4a)、(5)において何が主語を文頭に移動させるのかという話になる。先に結論を記すと、GB(統率・束縛)理論と呼ばれたChomsky(1981)では(6)の帰結だと考えたということである。

(6) 格フィルター (Case Filter)

音形のある名詞句には抽象格が付与されていなければならない。

ここで何が名詞句に格を与えるか（格付与子と呼ばれる）が重要なのであるが、(1) の *her* に対格（目的格）を与えてはいるのは他動詞の *hit* だと容易に理解されると思われる。それでは (1) = (5) の *he*, (3) の *she*, (4) の *he* に主格を与えてはいるのは何かということになるが、「主格の格付与子は Pres (現在) や Past (過去) などの時制」だと考えるのである。(Chomsky (1981) 当時は [+FIN] (定形) の INFL (屈折要素) と記されていたが、ここでは時制と考えて差し支えない。)

以上を踏まえると、(3a) では本当なら *her* は *hit* から対格をもらいたいが過去分詞（=形容詞）になってしまって格がもらえないため、あるいは (4) では不定詞標識の *to* は現在も過去も持っていないので、それぞれ「主語は時制から主格をもらうために文頭に移動する」という帰結になるのである。

筆者は上述の見解が今も正しいと思うが (Nomura (2006), 外池 (2019) なども参照), Chomsky (1995) 以降の初期極小主義理論では「主語の移動は EPP 素性 (EPP feature) に駆動される」とする考えが主流となった（特に Chomsky (2000, 2001) 以降）。EPP 素性は日本語に訳せば「拡大投射原理素性」となるが、要するに「文には主語が存在しなければならない」ことを保証するために設定された素性であって、重要なことは「主格の格付与と主語の移動を分離したこと」である。例えば、2000 年代前半の Chomsky は *probe* (探査子)・*goal* (目標子) に基づく一致 (agreement) 理論を仮定していたが、(3a) を例に非常に単純化して説明すると、(i) Past が探査子となって、樹形図を下に降りていって、最初に (*him* ではなく) *her* を目標子として見付け、主格を与え、*she* となる。(ii) それとは別に Past (正確には T (時制)) のところに [EPP 素性] があり、*she* を引き上げるということになる。しかし、英語では (i) と (ii) の演算はほぼセットで起こると言ってよい。例外は以下のアイスランド語のような例である。

(7) *Það voru lesnar fjórar bækur.*

There were read (主格複数) four books (主格複数) (Sigurðsson 1996: 12)

EPP 素性は要するに規定 (stipulation) であり、可能な限り廃された方がよい。最近の Chomsky (2013, 2015) はラベル理論 (Labeling Theory) を提案し、句構造の範疇名 (vP, TP, CP など) がどのように決定されるかを模索している。それに基づけば、EPP 素性を仮定せず、句構造のラベル名を決めるための自動的な帰結として、主語の移動が説明できるとしているのだが、この理論自体あるいは理論全体が妥当であるかは経験的に決められるべきものである。 (野村 忠央)